衣生活行動における圏域・境界と許容範囲

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): clothing life behavior, sphere, boundary, acceptable level 作成者: 内田, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7386

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

原著論文

衣生活行動における圏域・境界と許容範囲

内田直子
大妻女子大学家政学部被服学科

An Acceptable Level for Sphere and Boundary Concerning Clothing Life Behavior

Naoko Uchida

Key Words : 衣生活行動（clothing life behavior），圏域（sphere），境界（boundary），許容範囲（acceptable level）

要旨

衣生活において目的を持って別の行動に移る場合、併せて服装を替えることは通常よくある行為である。しかし着替えることなく別行動に移行した場合、自身は他者に出会いたくない、またそれを見る他者には、なぜこの場でそのような服装なのかなどの感情が生ずることがある。本研究では、ある特定の場所で着る服装が、どのエリアまで移動することが可能なのか、圏域および境界などの視点から地理的許容範囲について質問紙調査にて考察した。

その結果、女子 9 割、男子 6 割が、自身の部屋着で自宅外のどこまでも行くことはできず、特に女子の場合、ゴミ捨てや自宅近くの自販機までは比較的行きやすいが、コンビニや公園までは行きにくく、またサンダル履きで公共交通機関を利用することも憚られた。他者に遭遇するかどうかが一つの境界とみられる。また、医療白衣着用者の職場外出を見た場合、その場所が病院の近所より遠方、また飲食処であると女子はそれが気になり不快感も高くなっている。しかし、男子は女子ほど気にならず、また不快感も低い。男女間の外出時の意識の違いが、服装の圏域・境界の意識の違いに通じ、場合によって社会的場違いや違和感の一因になっているのではないかと思われる。

1. 緒言

衣生活において他の行動に変わる時、その目的に併せて衣服を替えることは通常よくある行為である。しかし着替えることをせずに他の行動に移した場合、その服装を見た他者には、何故そのような服装がここにいるのか、また当事者は他の人に出会いたくないなどの感情が生ずることがある。

なぜその場所にそのような服装がいるのかという例として、2010 年の上海万博の時に、市民がパジャマ姿で街中を歩くため、海外からは違和感が生じることを当局が察知し、市民に指導したことがニュースになった[1)]。もともと上海に住む人々にとってパジャマは、戦前一部の特権階級の者だけが着用したという文化的背景があり[2)]、市民にとってはそれが長らく続いているだけのことだが、海外の現在の生活文化からみると違和感となってしまう。

また、普段着以外に特定用途として着用する衣服の事例では、健康管理に注意喚起を促した健康飲料メーカーの広告がある新聞に掲載された[3)]。その広告写真は、横断歩道で信号待ちをしている大衆が、スーツ姿のサラリーマンと白衣の人たちで成り立っているものであり、この白衣の場違いのインパクトをあえて狙ったものであろう。しかし、言い換えると、普段の生活では白衣姿が街中にいるのは違和感が非常に高いことになり、このような状態は違和感からさらに不快感にまで至る可能性がある。

以上の視点を踏まえて、ある特定の場所で着る服装が、どのエリアまで移動することが可能であるのか、圏域および境界などの視点から地理的許容範囲について考察した。

なお、服装と場所の適合の研究には、提示された内空間・外空間とどの種類の服装がどの程度適合しているかの研究[4)]、特定の場所における集合状態の着装者の服装対比からみた場違いの研究[5)] などがあり、いずれも単一場所・空間での適合の話だが、本

研究は、そこに移動の概念を付加させ検討するものである。

2. 研究方法

ある特定の場所で着る服装が、どのエリアまで移動することが心理的に可能なのか、地理的許容範囲について検討するため以下の二つの視点から調査を行なった。

2-1. 個人的空間の自己圏域について

部屋着、サンダルなど個人的空間使用のものを着用した場合、自宅の外のどこまで行くことが可能か、質問紙調査にて 2013 年に女子大学生 93 名と比較参考として 2014 年に男子大学生 28 名に実施した。

2-2. 社会的空間の自己・他者の圏域について

特定用途とされる白衣（医療用、飲食店スタッフ用）について、自己および他者別にその服装でどこまで行くことが可能か、質問紙調査にて 2014 年に女子大学生 109 名と男子大学生 28 名に実施した。

医療用白衣では他者がその白衣を着用しているのを見た場合について、「病院内のトイレ 」「病院外のコンビニ（近所）/（遠方）」「病院外のスーパー（近所）/（遠方）」「病院外の食事処（近所）/（遠方）」と提示した 7 カ所において、医療関係の白衣着用者がいた場合、気になるかどうかを「気にならない」「僅かに気になる」「やや気になる」「かなり気になる」「非常に気になる」まで、また不快かどうかを「不快でない」「僅かに不快」「やや不快」「かなり不快」「非常に不快」まで、それぞれ 5 段階で評価してもらった。

飲食店スタッフ用白衣では自己と他者の両方の着用について、駅構内の「トイレ」「コンビニ」「スーパー」「他店舗へ食事」と提示した 4 カ所において、医療用白衣と同様な方法で気になるかどうか、不快かどうかを評価してもらった。

3. 結果と考察

3-1. 個人的空間の自己圏域結果

(1) 服装の着替えの有無と行動圏域

基本的な衣生活習慣として外出時に着替えるかどうかは、女子は 96.8%、男子も同様に 96.4% が着替えの考えを持っている（図 1）。図 2 に示すもともと女子の部屋着の種類では、複数回答で「スエット」が 53.8% と過半数を超え、その他は「ジャージ」「パーカー」「パジャマ」などである。

次に、図 3 に示すこの部屋着でどこでも行かれるかどうかは、女子の 92.5% が「いいえ」とし、これは、最初の出かける時に「着替える」が 95% 以上であったことと連動した結果といえる。しかし、男子は女子と同様に 95% 以上が「着替える」としたものの、部屋着（スエット）のままでどこでも行かれるが 35.7% と女子の約 5 倍を示し、この結果から部屋着では、男子の地理的許容範囲は女子より遠いもしくは広いことがわかる。

さらに、図 4 に示す部屋着で公共交通機関に乗れるかどうかは、女子は 90% 以上できない結果となり、自宅から公共交通機関までのどこかに部屋着で行かれるかどうかの境界があることになる。

(2) 服装の心理的行動の境界

部屋着で行かれるか否かの心理的抵抗について、前述の女子の部屋着では「どこでも行かれる」に「いいえ」とした人（92.5%）に、自宅外に出る時、遠近の指標として「ゴミ捨て」「家から一番近い自販機」「家から一番近いコンビニ、スーパー」「近所の公園」の四つの場所のどこまでなら抵抗がないかについて尋ねた結果が図 5 である。「ゴミ捨て」の

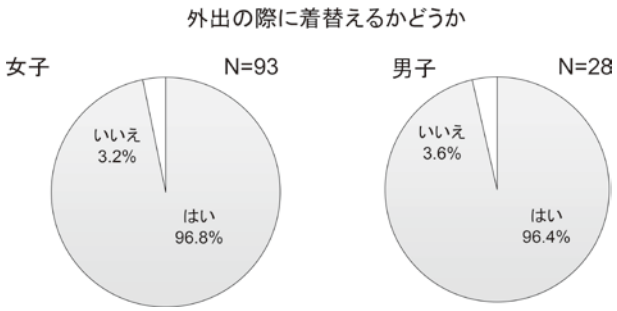

図 1　外出時の着替えの有無

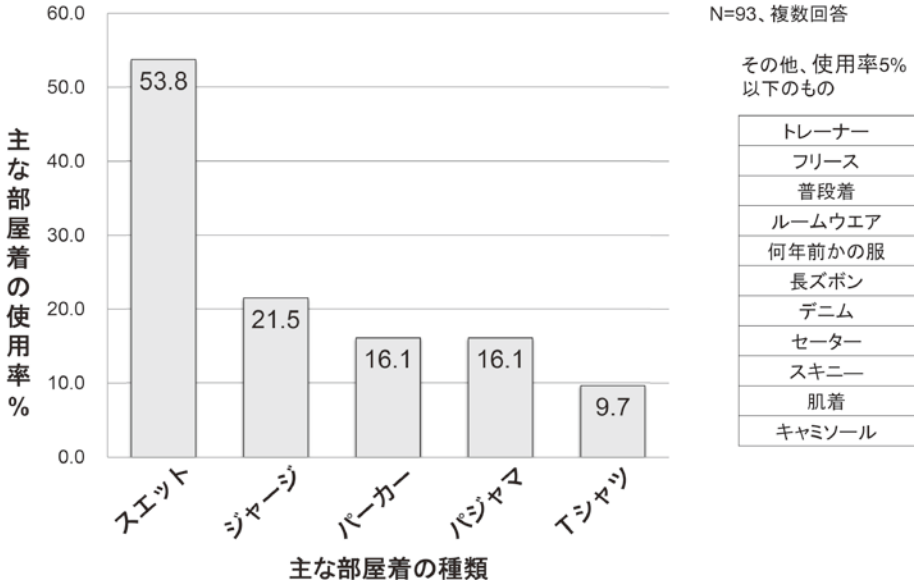

図 2　女子の部屋着の種類

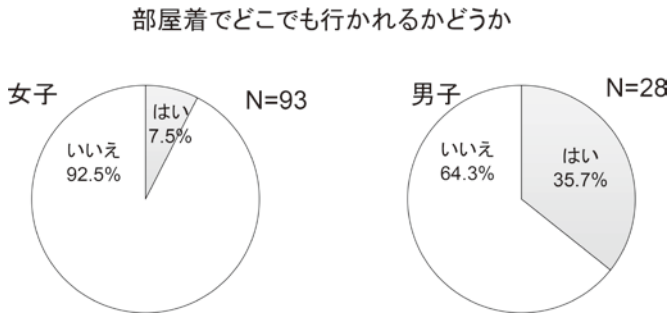

図 3　部屋着での移動の有無

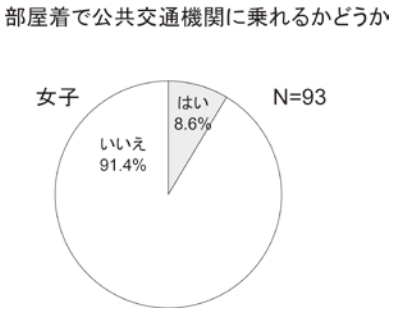

図 4　部屋着での公共交通機関の利用有無

場合、「行けない」が 17.4%、時間帯によって「どこかで可」が 41.9% で、その内、朝なら 30% 余りが、夜なら 20% 余りが可能としている。「家から一番近い自販機」の場合、「行けない」が 24.4%、時間によって「どこかで可」は 50% おり、そのうち夜なら 40% 以上が可能としている。「家から一番近いコンビニ、スーパー」、「近所の公園」は、「行けない」が 60% 近くと過半数を超え、時間によって「どこかで可」でも夜に約 20% であった。

ここで、図 6 の「どこかで可」と「いつでも可」を併せて「行ける」とし、「行けない」と比較した場合、「ゴミ捨て」「自販機」に行けるのは約 80%、「コンビニ、スーパー」「公園」になると逆転し、行けるのは約 40% となり、個人対応可能な範囲と対人が関わる範囲の間で境界が生まれることがわかる。

男子の場合、図 7 に示す「どこでも行かれる」に「いいえ」とした人（64.3%）が、女子と同じ四つの

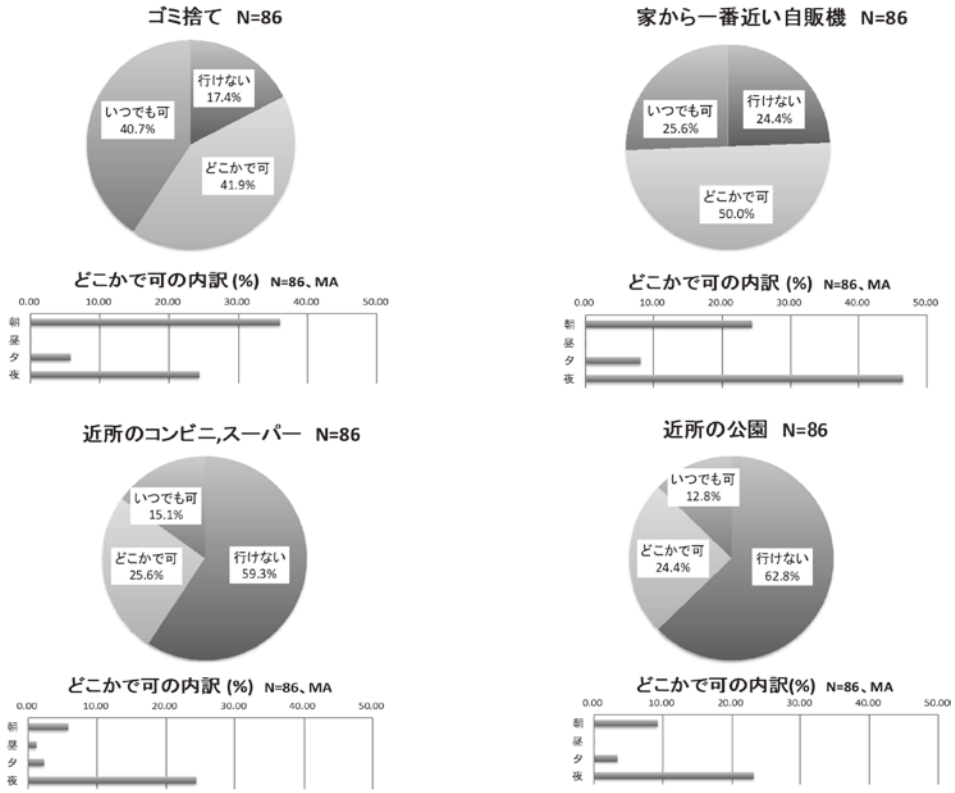

図 5　女子の部屋着による場所および時間別心理的抵抗

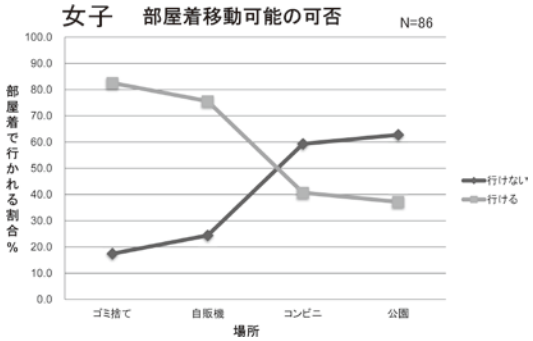

図 6　女子の部屋着による場所移動の可否傾向

場所については「行けない」が約 10% 以下程度で、押し並べて女子より許容度が高くなる。また、図 8 の「どこかで可」と「いつでも可」を併せて「行ける」とし、「行けない」と比較した場合、どの場所も部屋着でほぼ行くことが可能である結果となり、部屋着は女子には圏域に限定的な部分があるが、男子は縛りが少ないものといえる。

(3)　履物の行動圏域

図 9 に示すサンダルでどこでも行かれるかどうかは、女子は 28.0% が行かれるという結果となった。部屋着では 7.5% であったことに対し約 4 倍ほど移動可能者が増加しており、服装は全身が見えるがサンダルは足下のため目立ち難いことが関係していると思われる。

また、図 10 の公共交通機関もこれと相俟って、25.8% が公共交通に乗ることが可能となった。サンダルでは「どこでも行くことはできない」人たちに、前述（1）の同じ 4 カ所ならどこが可能か聞くと、図 11 の全く行かれない割合が少なくなり、「ゴミ捨て」で「行けない人」は 1.5%、「近くの公園」でも 23.9% 程度と部屋着より割合が減少となった。サンダルは部屋着よりは遠出ができ、場所によっては抵抗がないという状況がみえる。

図 12 の「どこかで可」と「いつでも可」を併せて「行ける」とし、「行けない」と比較した場合、どの箇所も「行ける」が多く、前述の公共交通機関は利用できないが近くの公園ならば約 80% が行か

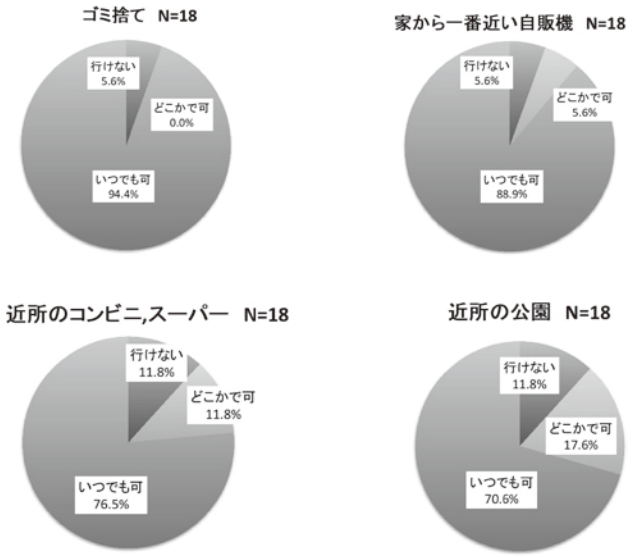

図 7　男子の部屋着による場所別心理的抵抗

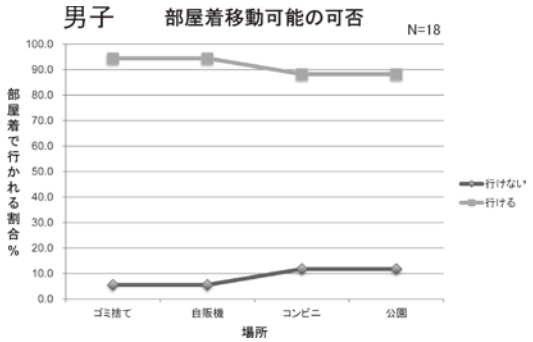

図 8　男子の部屋着による場所移動の可否傾向

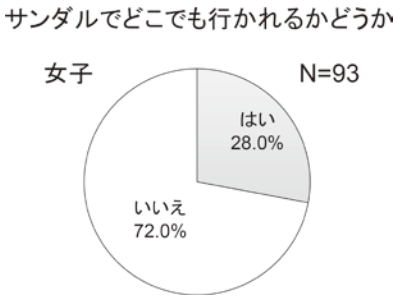

図 9　サンダルでの移動の有無

れるということになる。図 12 は、図 8 の男子の部屋着の結果と酷似しており、男子の普段着と女子のサンダルは同程度の認識といえるのではないかと推

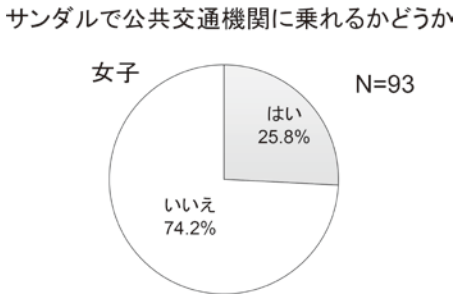

図 10　サンダルでの公共交通機関の利用有無

察できる。

3-2.　社会的空間の自己・他者の圏域結果

（1）　医療用白衣について

女子評価者では、医療用白衣は病院内で着用するものという意識があるためか、図 13 に示す「病院内トイレ」では「気になる」ことも「不快度」もほぼない。「病院外」では、近くのコンビニならば行動の想定内と捉えられるが、遠くになると想定外となるためか、気になる度合いも 1 ポイント以上増加している。また、同じ近所であっても「コンビニ」「スーパー」「食事処」により、気になる度合いとともに不快度も増加傾向を示す。特に遠方の病院外の「スーパー」や「食事処」では、おそらく「なぜここにこの服装でいるのか」の意識が高く、かなり気になり不快度も「近くのコンビニ」の 2 倍近い値に

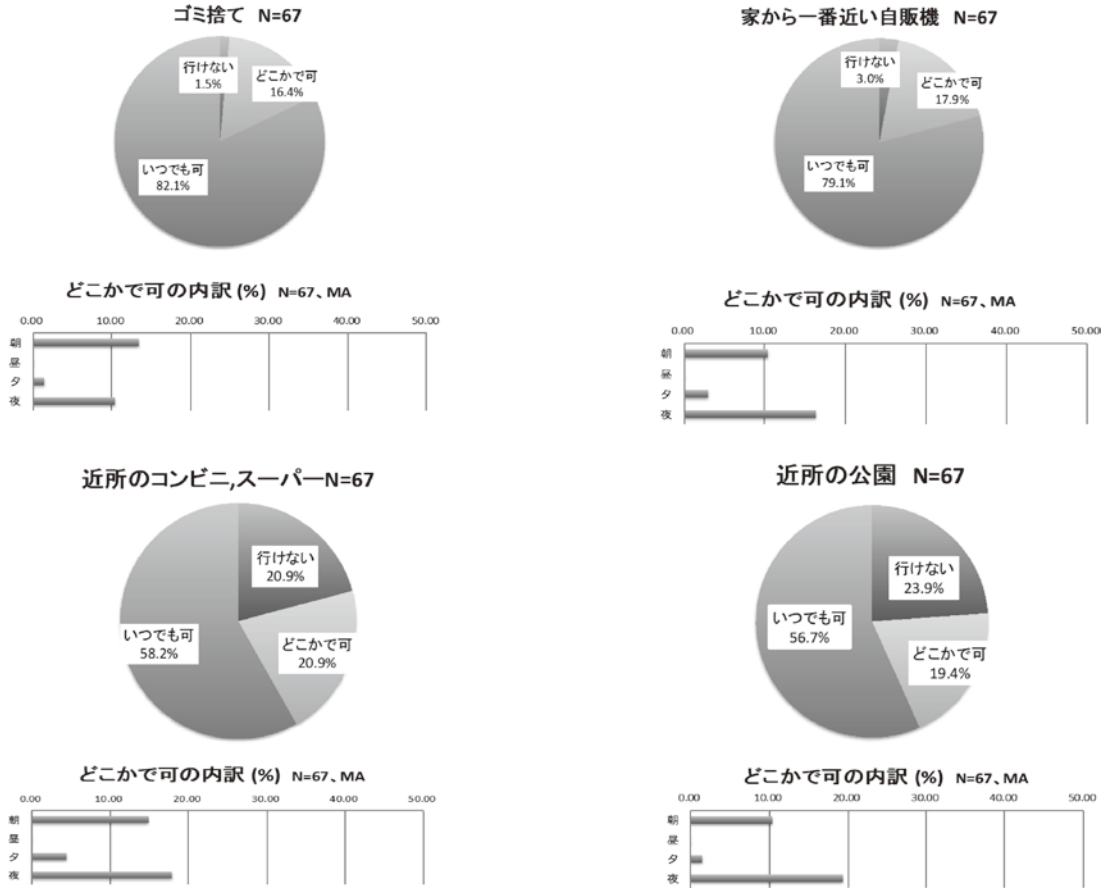

図 11　女子のサンダルによる場所および時間別心理的抵抗

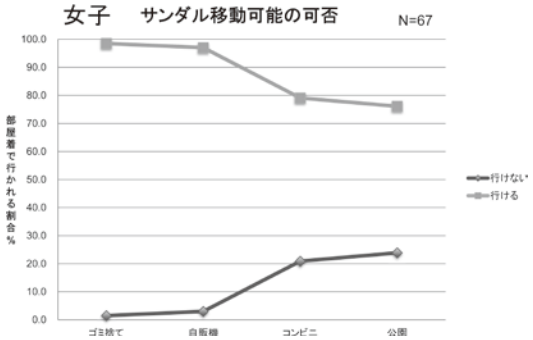

図 12　女子のサンダルによる場所移動の可否傾向

なっている。女子評価者は明らかに、白衣と場所の違和感、場違い感を察知していることがいえる。

一方、図 14 に示す男子評価者では、女子ほどに場所による気になる度合いの違いが見られず、特に不快度に関しては 1.5 前後で格差がなく、このことから男子は本調査においては、女子より無頓着であると考えられる。

(2)　飲食店スタッフ用白衣について

図 15 の女子評価者は、自分が飲食店スタッフの当事者として着る白衣では、駅構内の「コンビニ」やその他の「トイレ」「スーパー」より「他店舗」に居ることが気になって不快であり、違和感がある結果となった。しかし、他者がそういう状況にある場合は、本人の場合よりその度合いは低く、自己が気にするほど他者のことは気にしていないことになる。

図 16 の男子評価者では、着装当事者としても女子評価者より評価範疇の格差が低く、また自己と他者では、女子評価者と同様に他者への評価が低く気にしていないことがうかがえる。

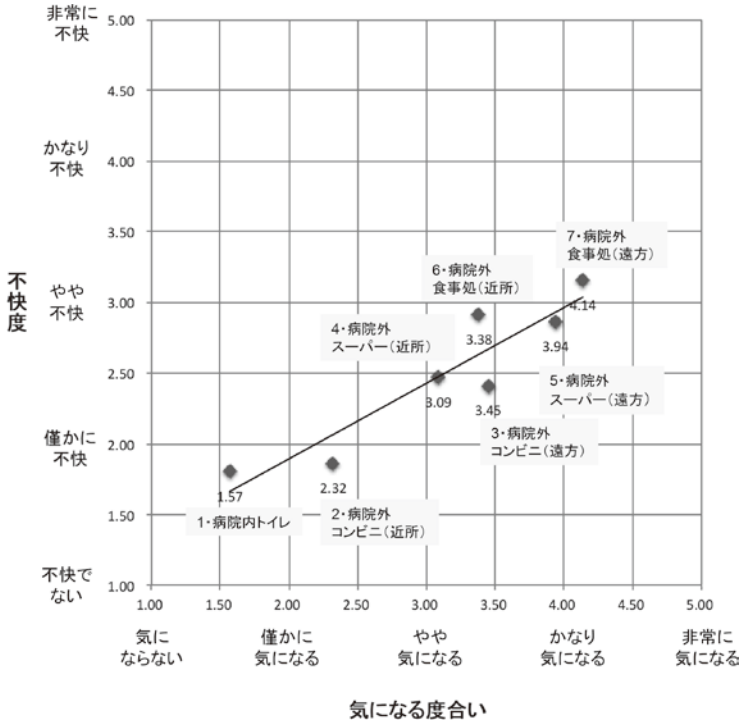

図 13　女子評価者・医療用白衣について

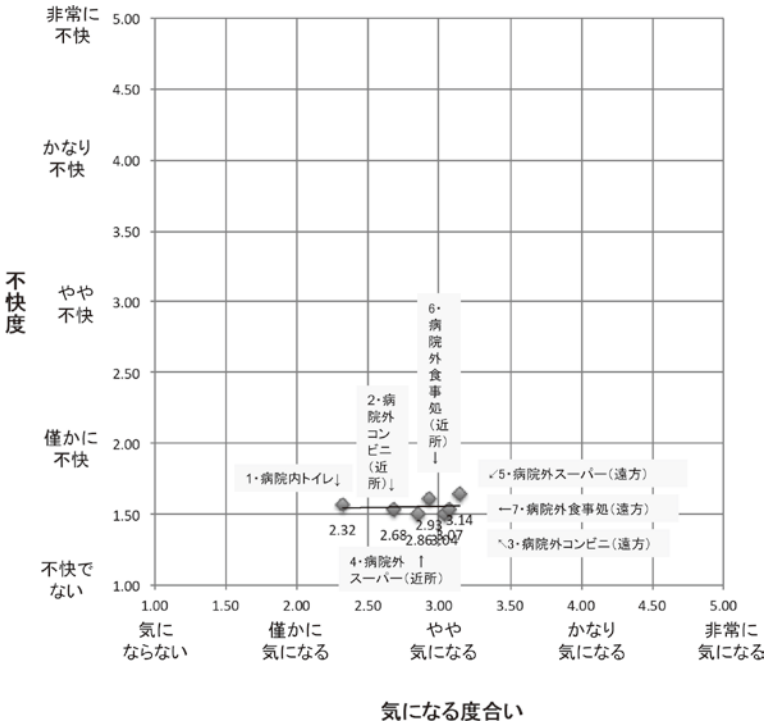

図 14　男子評価者・医療用白衣について

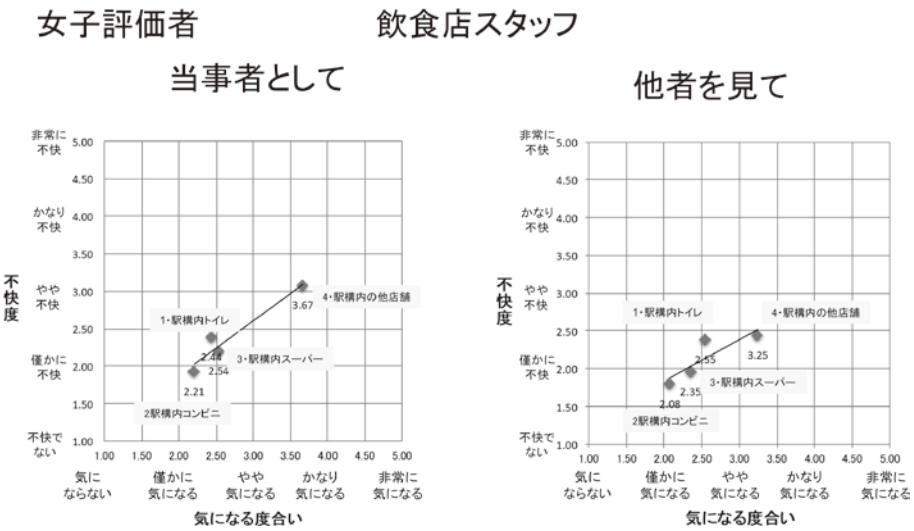

図 15　女子評価者・飲食店スタッフ用白衣について

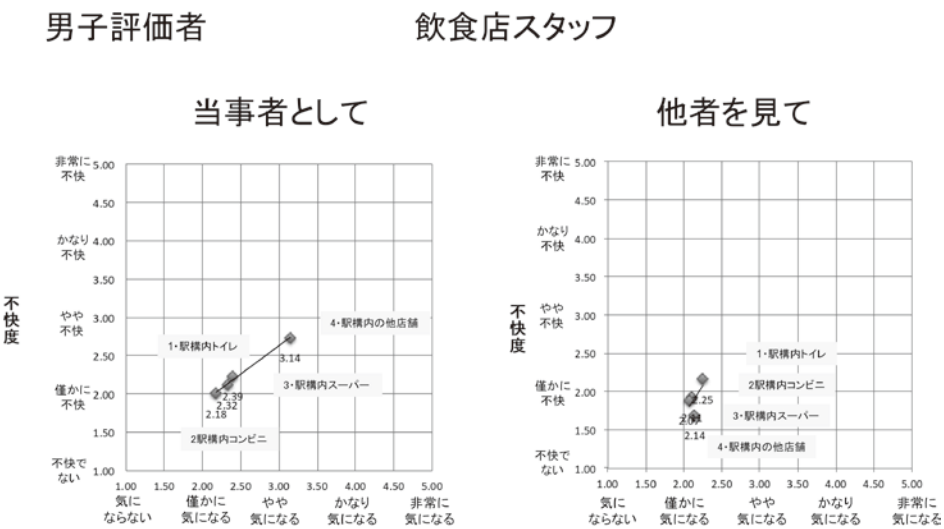

図 16　男子評価者・飲食店スタッフ用白衣について

4.　結言

自身および他者が着装している服で、どのエリアまで移動することが心理的に可能なのかを地理的許容範囲について考察を行なった。

女子は家庭内の服装での外出は、自宅から離れるにつれ、それを着用することが憚られる。対人に遭遇する可能性があるかどうか、自力で行動できる範囲内であるかどうかが一つの圏域と考えられる。また、同じ普段使いのものでもサンダルになると、衣服よりは圏域の範囲が広くなった。これは見られる度合いによるのではないかと考えられる。

さらに、白衣など限られた場所の服装は、その着装が想定される場所より遠いほど気になり、不快感も増長した。飲食店スタッフ用白衣では、当事者より他者の行動のほうが不快感は低い傾向がみられた。

全体を通して、男子は女子ほど境界意識が低く許容できる圏域が広いことも認められた。ただし、言い換えるとこの結果は、男性は悪気のないことで

も、女性は不快感の意識が高いため、両者の感じ方の違いが顕著になった時、社会的トラブルの元凶になるのではないかと懸念する。この服装の圏域の結果は、社会の軋轢をなくすためにも、他者への気遣いが必要となる事項と考える。

付記：本稿は、2016 年度（一社）日本家政学会第 68 回大会にて「衣生活行動の圏域・境界に関する一考察」として口頭発表したものに加筆修正したものである。また、本研究に被服心理学研究室 2013 年度所属の中村美穂、三浦咲、2014 年度所属の橋本里紗、村山佳寿美、横山はるかの五氏の協力を得た。

注および引用文献

1） Record China，＜写真で見る中国の今＞上海万博の舞台裏で…消えることのない長屋生活，2010 年 5 月 8 日 https://www.recordchina.co.jp/b41967-s0-c30-d0000.html（2022.3.4 取得）

2） Record China，＜早分かり＞合理的，気軽，それにオシャレ…？上海人が「パジャマ外出」をやめない理由，2009 年 10 月 29 日 https://www.recordchina.co.jp/b36668-s0-c30-d0000.html（2022.3.4 取得）

3） （株）ヤクルト本社の新聞広告，「この国の血圧が心配です。」，日本経済新聞，2006 年 10 月 11 日

4） 内田直子，小林茂雄，長倉康彦：外空間と内空間における女性服装の適合度，日本官能評価学会誌 2(1)，29-37, 1998

5） 内田直子，小林茂雄，長倉康彦：人形モデルによる集合内の服装の場違い感に関する実験的研究（第 3 報）ランダム配置における空間の影響，繊維機械学会誌，53(5)，T121-T128, 2000